

「菩提心思想の系統別考察」

田 上 太 秀

はじめに

菩提心研究は、仏教の各心識論と比較検討しなければ、その成果は完全に得られないと考えるが、本論はそれへの研究の一端として系統別に見た菩提心説を考察しようと思う。

こゝでは系統を三區別した。第一系統は如来蔵・仏性の思想系統、第二系統は唯識系の思想的影響のあるもの、第三系統は中観派の思想的影響のあるもの、と一応三系統に区分した。これらの各系統別に見る菩提心説論の経論を取り上げるが、経論の選択は、一、著者、内容が各系統の思想的影響をうけていること、二、各系統に於いて菩提心のみを取り扱った経論であること、三、菩提心説が一応まとまって特質あるものであること、以上によって本論文が取り上げた経論中、菩提心論の著者竜猛についてはこゝでは取り扱わなかった。また各著者に関しても深く立入らないが定説に従ってそのままにした。また各経論所説の菩提心思想と各系統の思想との

関係については、一応さけることにした。

一 大乘法界無差別論の菩提心説

本論は堅慧の作とされ、一名如来蔵論とあるから、如来蔵思想を唱道する論書であることが分る。しかし内容に於いて如来蔵の名称を用いず、菩提心の語をもって説論していること、特に菩提心十二義にあっては、そこに菩提心そのものの意義を明確にし強調しようとする配慮と意図とが存している点に注目すべきであろう。本論は菩提心十二義の中で、菩提心の行相を四種心を以って説示するが、考えるに第一系統所屬の経論で菩提心を説くものはすべて四種心を中心に説論を進めている。この四種心の典型的定型は「菩提心論」の発心行願、勝義、三摩地¹⁾の四種心である。この四種心説は第一系統の経論所説のそれを継承しているとは言え、「菩提心論」²⁾所説の菩提心は、大日経住心品に説示する「如実知³⁾自心」を意味し、第八阿頼耶識の平等心の上に生起する菩提心を説く

ことから、この点区別して考えなければならぬ。

まず四種心の原型について考えよう。勝又博士は大乗中期に於ける論書、就中大乘莊嚴經論にその原型を探查しうると言われているが、⁽³⁾ 塑って文殊師利問菩提經にも原型が発見されるようである。

經に、「一者初発心。二者行道心。三者不退転心。四者一生補処心。」と菩提心の四種を説示する。この四種は、初発心は行道心の因となり、乃至不退転心は一生補処心の因となり、一生補処心は一切智の因となる、という関係にある。更に四種の心の意味を、經に

復天子。(一)当知初发心如种子穀田中。行道如穀子增長。
不退転心如華果始成。補処心如花果有用。……(二)又初发心能過声聞地。行道心能過辟支仏地。不退転心能過不定地。一生補処心安住定地。……(三)又初发心從因生。行道心從智生。不退転心從斷生。補処心從果生。⁽⁵⁾

と述説している。今これを大乘莊嚴經論の四種心説と考えられる説論とその他の經論の説論とを抽出し、比較検討することによって、本經所説の四種心説と考える理由の裏づけにしたい。

莊嚴經論は発心を別して二種あるとして、入地前発心を世俗発心、入地後発心を第一義発心とするが、就中、第一義発心に六勝ありと説く中で、第一生位勝の四義について、

発心品に

種子勝。信大乘法為種子故。生母勝。般若波羅蜜為生母故。胎藏勝。大禪定樂為胎藏故。乳母勝。大悲長養為乳母故。⁽⁸⁾

とある。帰依品では相違して、

一種子勝。以菩提心為種子故。二者生母勝。以般若波羅蜜為生母故。三者胎藏勝。以福智二聚往持為胎藏故。四者乳母勝。以大悲長養為乳母故。⁽⁹⁾

と説示されている。所引個所で種子勝と胎藏勝の説示内容が二品の間で異なるが、特に種子勝の「信大乘法」と「菩提心」との関係は仏性論に説かれ、その一致を見ることが出来る。それはともかくとして、次に莊嚴經論の四種心説の流れを汲んだと考えられる仏性論、宝性論、法界無差別論の四種心をあげ、併せて文殊師利問菩提經の四種菩提心説を並列させ、本經のそれが四種心の原型であると考える理由を考察しよう。

文殊師利問菩提經

一初发心。一如種子穀田中。

初发心從因生。

二行道心。一如穀子增長。

行道心從智生。

三不退転心。一如華果始成。

不退転心從断生。

四一生補処心。ゝ如花果有用。

一生補処心從果生。

大乘莊嚴經論

一種子勝。ゝ信大乘法為種子故。(発)

以菩提心為種子故。(帰)

二生母勝。ゝ以般若波羅蜜為生母故。

三胎蔵勝。ゝ大禪定樂為胎蔵故。(発)

以福智二聚住持為胎蔵故。(帰)

四乳母勝。ゝ大悲長養為乳母故。

仏性論⁽¹⁾

一如父身分。ゝ信樂大乘。――因。

二如母。ゝ無分別般若。――縁。

三如胎蔵。ゝ破虚空三昧。――依止。

三如乳母。ゝ菩薩大悲。――成就。

宝性論⁽²⁾

大乘信為子。

禪胎大悲乳。

般若以為母。

諸仏如実子。

法界無差別論⁽³⁾

信為其種子。

三昧為胎蔵。

般若為其母。

大悲乳養人。

以上五經・論の中、通観して文殊師利問菩提経以外四論では、四種心の説示が用語こそ相違しているが、内容的に同じであると考え。では文殊師利問菩提経の説は他四論と内容に相違点があるだろうか。

まず初発心が如種子であり、因によって生ずるといふ点では他四論所説とほぼ一致する。次に行道心で智によって生ずるといふ智は、因地の種子が展開して生ぜしめた仏智であるから、行道心はこの仏智の効用によって発動する心である。経は穀子増長と言ふ。この意味に於いて他四論の生母勝般若波羅蜜に相当すると言えよう。経の不退転心は断煩惱によって取得される心で、福智円満、大禪定を意味する。経は如華果始成と言ふが、他四論の胎蔵勝に通ずる心であると考えられる。最後の一生補処心を經に從果生と説示するが、果は涅槃を意味する。また如花有用と説く中で、用は働きてあつてその心は更に一切衆生救済のために大悲心を発起し発動する働きをなす。この意味からして一生補処心は他四論の乳母勝大悲長養の意に通じるものと考え。すでに考察したことかから推して文殊師利問菩提経の初発心、行道心、不退転心、一生補処心の四心は他四論の四種心説と用語表現は相違して

も、所論の内容は同義と見做すことが出来るのではないだろうか。さすれば文殊師利問菩提経に於いて、莊嚴経論より以前に菩提心の四種が説示されていたと判断され、大乘初期に四種心の原型が蔵されていたと考えることが出来る。

右に菩提心の四種の原型を文殊師利問菩提経に見るを得たが、次にこの四種を中心に菩提心説をいかに説いたかを、大乘法界無差別論を中心に考察しよう。

四種心は菩提心自体とその行相を説示した類型の一つである。これを無上依経では菩提の語に、仏性論では仏性の語にそして宝性論では如来蔵の語に各々換言して述説している。

法界無差別論では菩提心の語によってこの四心を説くが、本論の菩提心義は内容的に如来蔵を説論しているから、菩提心は如来蔵と考へなければならぬ。たゞこれらの経論は問題提起に於いて相違すると考へられるが、相互に思想的関連が密接であることから——特に時代の思潮として、菩提心、仏性、如来蔵が同義に取り扱われた。——用語の解釈には注意すべきであろう。とにかくわれわれは第一系統の中で、これら諸経論所説の菩提心説の流れを汲み集成したと考へられるのが法界無差別論の菩提心説であろう。

本論書の中心は菩提心十二義の説示にある。内容に第六分位の頌で凡夫、菩薩、諸仏の三位を説き、第七と第十位までは凡夫位を、第十一、第十二の二位では仏果を説くが、本論

では菩薩位のみが明示されていない。これは菩薩が染中淨位として染淨いずれをも具有すると考へ、また菩提心が「第十無差別の頌の十種無差別の中で染淨諸法の所依止となる」という説論と考へ併せて、第一と第六位までの菩提心位の個所に菩薩位を含め説示したものと考へることが出来る。従つて本論書は菩提心は菩薩の考へを暗に説示せんとしているといえる。以上が菩提心十二義の結構である。

論に「信為其種子。般若為其母。三昧為胎蔵。大悲乳養人。」とある中で、「信為其種子」の積で「法に於ける深信を菩提心の種子とする。」と説することから、仏性論所説を踏襲するものと考へる。この四種が菩提心の根本因でなく、因行即ち正因の菩提心を開顯する縁となるもの、四縁である。論では四種の心は正因菩提心開顯の縁と考へられている。仏性論所説の応得因はこゝの菩提心を、加行因がこゝの四種心を各々意味している。すなはち菩提心を正因とし、信樂は了因・生心となり、般若三昧は縁因となり、信樂と般若三昧とが因縁和合するによつて菩提心は開顯され、大悲が現成すると有り。法蔵の疏に「諸法の出生・相続の因たる種子に三因あつて、正因を菩提心とし、信樂が法(菩提心)を開顯せんとすれば了因となり、轉身化身を希望すれば生因となる。この菩提心は地の如く所依の如く海の如く出生因となり、善苗を生長し聖法の聚集処となり、如来を出生する。こゝに大

悲が円満される。」とあるは、前述のことを言う。更に「自性無染著。如火宝空水。白法所成就。猶如大山王。」と菩提心に自性無染著の離染清浄相と、白法所成就の自性清浄心との二自性があると説く。これは仏性論²⁰で、仏性(如来蔵)の自体相を通相の自性清浄心と別相の如意功德性、無異性、潤滑性と分けて、仏性の自体を明かす思想から来ている。仏性論の通相は本論の自性清浄心に相当し、別相は離染清浄相に当る。仏性論の仏性の二体相から考えると、本論の自性清浄心は菩提心の本性を示し、離染清浄相はその働き方、すなわち実践的に菩薩が因位の修行から果位に至るまでを意味すると言える。また「此心性(菩提心)明潔。与法界同体。如来依此心。説不思議法。」と本論に説くを疏²²に「此法性即是法界。亦真如。或言實際等。我依此等類故。約無染義。説名性清心。」と釈する。これによって本論は菩提心は法界、不思議法、真如、實際と同義に解釈されうることを説示していると言える。また本論は菩提心は無差別相の故に、衆生、菩薩、如来と同等であると、頌に「不浄衆生界。染中浄菩薩。最極清浄者。是説為如来。」²³と説くが、この衆生、如来の二位と菩薩との関係を説明している個所は見当らない。ということとは前述のように、菩提心を本論が説示することが自体が菩薩の説示である²⁴という推論に賛意を表することが出来よう。この見解に立つと、菩提心即菩薩となる。さすれば、菩

薩は発菩提心者であるという言い方は、結局は菩提心が菩提心を発動するという考えに至ることが出る。

以上を要するに、本論書の著者は宝性論に如来蔵思想を説き、人間の心理的根拠、成仏の根拠を明瞭ならしめるによって、如来蔵第一義諦を唱道し、人間の覚体を如来蔵に求めたのに対して法界無差別論では実践的根拠を求め、それを菩提心に発見した。これは修行への導引と求道への手掛りを衆生に容易ならしめた。思うに堅慧は理論門を如来蔵を以って説き、実践門を菩提心を以って説示し、衆生救済を成就せんと試みたのであろう。

二 「菩提心論」の菩提心説

この論書は密教思想が濃厚なものである。本論は四種心説を一応説く論書であるが、「論」所説のものは、発心を除いた三種心である。しかし発心を看過した菩提心説が成立しないことから考えれば、発心、行願、勝義、三摩地の四種心の組織を認めることが出来よう。

密教では依主義と相違釈との二つの見解を以って菩提心を考えるが、本論書は後者の見解をとる。大日経住心品²⁵に説く「如実知心」の見解を受けるもので、仏を対境に求めず、凡夫の当体は菩提・仏と覚了する心、すなわち第八阿頼耶識の平等心の上に生起する菩提心を主張する。「論」は菩提心

について、「既発如是心已。須知菩提心之行相。其行相者。三門分別。諸仏菩薩。昔在因地。発是心已。勝義、行願。三摩地為戒。」と、菩提心の三種行相を説示するが、要するに菩提心の展開に他ならない。行願心とは下化衆生の求願心であり、勝義心とは一切法は無自性、空なりと了知する上求菩提の心を表わし、三摩地心は内心に自性清浄心を照見し、瑜伽秘法を修習する心である。約言すれば次第に大悲、大智、大定である。

また「論」は勝義心を因根究竟の三句を以って解説するが、それを考察する前に、三句説の源流を述べ、そして本論書が唯識学派の思想的影響を受けている一端をそれによって説明しよう。研究によると三句思想の源流は大方等大集経卷第二(大正十三、十一b、十四a)に求められるとあるが、定型化した三句に近い型が見られるものに、瑜伽論卷第三十五発心品の撰、根本、等流、所依止と大乘莊嚴経論の三句とがある。特に前者については、内容的に見て撰・根本が因、等流・所依止が根に相当するが、唯、究竟に該当するものが見当たらないのは最初のものとして致し方ない。今こゝで注意すべきことは、因に約される撰、根本の二語である。この用語は大衆部所説の根本識、撰識とは無関係のものと断定出来ないと思う。しかし大衆部所説のそれは種子依としてではなく、所依止として考えられたようであるから、瑜伽論の種子

説としての根、撰の考えとは別異であると言わねばならない。大衆部では不相応行としての根本識は顯勢的六識に対する依止としての潜在的識である。またこの根本識は「心識の活動をあらしめるもの、一人格の統一体でもあるもの」と言える。大衆部が心性本浄説を主張する派であるとすれば、本性浄心は根本識そのものである。つまり表面に顯われた意識は染汚であれ、根本識は本浄であることになる。この本性浄心すなわち根本識の考えが後の唯識派所説の阿頼耶識のように浄染の種子を撰持しつつも、それが潜在的在り方においてあるために清浄ということが可能である、という考えに繋っている。「菩提心論」は、この阿頼耶識思想の影響をうけ、このもとに三句説、三種心を説示したのである。

右のような思想的背景をもった本論書の三句説とその菩提心説を次に考察しよう。

「論」は、勝義、行願について華嚴經を引いて、
悲先慧為主。方便共相応。信解清浄心。
如来無量力。無礙智現前。自悟不由他。
是足同如来。発此最勝心。仏子始発生。
如是妙宝心。則超凡夫位。入仏所行処。
生在如来家。種族無瑕玷。与仏共平等。
決定無上覚。纔生如是心。即得入初地。
心樂不可動。譬如大山王。

とある。菩薩は大悲をもって先導とし智慧は大悲を成就する増上縁とし、化他の善巧方便がそれに随伴するとある。悲は行願、智は勝義であり、悲智は如来の本性であるといい、

「論」は菩提心は大悲によって生長し智を以って増上縁とする。しかし悲・智に必ず五相三密の妙行を修行する三摩地心が随伴すると説くが、これらを大日経住心品の「仏言菩提心為因。悲為根。方便為究竟」の三句を以って結ぶ。しかし先述のことから分るように本論書の三句は内容に於いて異なる。すなわち大悲為因、菩提心為根、方便為究竟となる。また「論」所説の四種心(発心、行願、勝義、三摩地)は内容的に見て、行願、勝義、三摩地の三種心は発心後の菩提心の行相を説示するものである。従って四種心は菩提心、行願心、勝義心、三摩地心となるだろうが、「論」では菩提心と銘をうって項を設けて説論していない。従って「論」では、菩提心の説明を三摩地心の中に於いて、阿字五転中の一つに菩提心を考え、それを開から入への展転で示し、結局は菩提心は所求菩提心として説かれた。空海の三昧耶戒序では菩提心に能求菩提心と所求菩提心との二種がある³⁸⁾と説くが、これは本論の所説に通ずるものと考えられる。要するに本論の三種心または四種心は、菩提心の行相を述べると共に、それは菩提心を円満成就することにある。

以上考察したことを要約して見ると、三種心は菩提心の働

き、すなわち行相を説き、三句は菩提心の内面的相を表示するものと思われる。覚体としての菩提心を内相、外相に於いて追求し説示したといえよう。

三、

a、菩提資糧論の菩提心説

本論では発菩提心とは、般若波羅蜜を行ずるによって一切法無自性、畢竟空であると観することであると説く。この観点から本論は、煩惱性と菩提心の関係に説き及ぶ。

煩惱は仏智を障えるもの、果への修行を害するもので、当然滅尽すべきであるが、「論」は、「応当畏煩惱。不応尽煩惱。当為集衆善。以遮遮煩惱」⁴⁰⁾と煩惱は滅尽してはいけないと述説する。滅尽するのではなく遮を以って煩惱を遮するのである。自在釈に「若し煩惱を断ずれば、則ち菩提の資糧を集むることを得ず。是の故に菩薩は遮制法を以って諸煩惱を遮す。煩惱を遮するによつて、それを無力ならしむる故」⁴¹⁾と、煩惱の活動を無力ならしめ、煩惱を生ぜしめず滅せしめずにして止めておくのである。また頌に「菩提煩惱性。不是涅槃性。非燒諸煩惱。生菩薩種子」⁴²⁾と、すなわち二乗は諸煩惱を滅却し涅槃をその性とするが、菩薩は煩惱を性とするとき、菩薩と二乗との相違点を指摘する。また菩薩が煩惱性である理由を菩薩の種子(菩提心)を生ずる因となるからとい

う。「論」所説は菩提心は煩惱なしには生起せず、菩提心の生因は煩惱であるとす。従つて仏、菩薩のみが煩惱性の故に発菩提心が可能であり、また衆生も煩惱具足の故に発菩提心すると言える。煩惱性の故によつて仏、菩薩、衆生は三位平等である。しかし、法華經中、譬喩品の舍利弗に、授記品の迦葉、須菩提、迦旃延、目連等に、五百品の富樓那等千二百人に、授学無学人記品の阿難・羅睺羅等二千人に、煩惱を断絶したるによつて授記するとあることは、本論の遮煩惱説とは矛盾するようだが、論に「記彼諸衆生。此記有因縁。唯是仏善巧、方便到彼岸。」と因縁あるを以つて仏は善巧方便して彼岸に到らしめるので、これは唯仏のみ知ると説明する。

既述のように本論書は煩惱性を有する故に発菩提心が可能であり、三位平等であり、また仏菩薩は有情界に在つて衆生救済が可能となると説く。菩提心を発した後は、頌に「我涅槃中。不応即作證。当発如是心。成成熟智度。」と説き、更に「我応修空。不応證空。我応修無相。不応證無相。我応修無願。不応證無願。」というように證上の修をなす、これは大乘菩薩の悪趣受生を如実に示すものと考ええる。

右に考察したように本論書は煩惱性と菩提心との関係を説示するだけで、菩提心の概念と行相等に關しては説を見ない。従つて本論書がこの空觀系統の中で菩提心「論」として

最初期のものと考えられる。しかし菩提心を現実の人間性の中にある煩惱性と関連して説示したことは、次に考察する入菩提行經と共に、此の系統の菩提心論として注目すべきものと考ええる。

d、入菩提行經の菩提心説

入菩提行經は八世紀に活躍した寂天 (Śāntideva) の作といわれるが、彼は中觀派の流れを汲み、月称の学派に属する人である。しかし彼の思想には、本經の内容から判断して密教的思想がなかつたとはいえない。

經は菩提心に二種あるとし、一菩提を願う心 *bodhipranidhicittam*, *Byān-chub smon-pai sems dan ni / ㄨ' 二菩提に行く(入る)心 *badhiprasthānacittam*, *Byān-chub nid yin no* とをあげる。經は「行く心」としての菩提心を最勝とし、「願う心」は心的意図を言うが、それは行動に移された「行く心」になるべきだという。その行く心に三種あるとし、一、布施行、二、自他平等 *parātnasamata* 觀行、三、入我々入 *parātnaparivartana* 行を説く。*

布施行は一切の所有を他のために施捨する行為であるが、經は「隣人と我とが恐れと苦しみを憎み嫌う場合に、自分のみを保護して他を保護しないようにその我というものに何の差別があるのか」と、要するに施与行は有情苦の滅を本面目とする説く。有情苦が皆滅するまで一切を捨離すべきとい

うが、その成就はいかにすべきかについて、自他平等観行を以つてするとある。大乘仏教の平等観は一般に悉有仏性の見解に立つものであるが、経は更に、現実的平等観を立てる。一切衆生は苦に於いてある故に平等であるという。自己の苦は他に影響しないとは言え、自他共に苦悩していることに変わりはなく、人間の苦に於ける共通苦は否定できない。経は君が自分の苦と言うものは、単に妄分別によつてのものでつまり君には常住の自我があるのではなく、觀念的現象の相続と聚合とがあるのみで、個の主体は存在しない、よつて彼の苦、我の苦といえる主体もない。更に主体のない苦を拒否する理由について、人は苦を拒否しようとするから、拒否する以上は一切苦は拒否されるべきで、もしそうでないとすればすべてと同様に自己の苦も拒否されてはならないという。述説は要するに現実的苦に於いて人間は平等である、自他一切平等であるという観点によつて一切苦の滅行の布施行は成就されるとする。更に経は布施行は入我々入行を觀行すべきという。すなわち自他合一、自他互融はそれである。人間の自我意識は我意識の反復によつて形成されるので、従つて自と他との関係でも他人意識を自己意識の中に反復することによつて習慣性となし、融合ならしめることが出来るだろうという。結果的に他身は自己身として把握され、自他の意識を払拭出来るのである。このように觀行すれば布於行は成就され

ると説く。

以上のように、菩提心を説くが、要するに菩提心はこの三種の行を修するによつて般若波羅蜜を得て、成就されると説くのである。

今まで各系統に見られる典型的な菩提心説を有する経論をあげ、その所説の内容と特色について考察したが、今後は、これら菩提心説の諸見解をもとに、他の思想との関連を見て更に密教思想の中にある菩提心説の後世への影響、またチベット訳に見る菩提心の語と思想に研究を進めることになる。

1 菩提心論(大正三一・五七二c) 既発如是心已。須知菩提心之行相。其行相者。三門分別。諸仏菩薩。昔在因地。發是心已。勝義。行願。三摩地為戒。乃至成仏。無時暫忘。

2 大日經住心品大(大正十一・一c)

3 勝又博士研究論文「菩提心展開論の系譜」印仏研九の一、四七頁。

4 文殊師利問菩提經(大正十四、四八二b)

5 右同。(大正十四、四八二c)

6 大乘莊嚴經論發心品(大正三一、五九六a)

7 右同。(大正三一、五九六a)

8 右同(大正三一、五九六b)

9 右同(大正三一、五九三b)

- 10 仏性論卷第三(大正三一、七九八a)
- 11 右同(大正三一、七九七a、七九八a)
- 12 宝性論(大正三一、八二九b)
- 13 法界無差別論(大正三一、八九二b)
- 14 「宝性論研究」宇井伯寿著一二七頁。「究竟一乘宝性論研究」中村瑞隆著五一頁。国訳一、瑜伽部十一「仏性論解題」坂本幸男識。
- 15 法界無差別論(大正三一、八九二c)八九三a)「八、一切法所依。以染淨諸法所依止故。」
- 16 法界無差別論(大正三一、八二二b)
- 17 法界無差別論疏(大正四四、六六a)
- 18 右同(大正四四、六五c)
- 19 法界無差別論(大正三一、八九二b)
- 20 仏性論(大正三一、七九六b、七九七a)
- 21 法界無差別論(大正三一、八九二c)
- 22 法界無差別論疏(大正四四、六七b)
- 23 法界無差別論(大正三一、八九三a)
- 24 宇井伯寿著「宝性論研究」四十頁参照。
- 25 「菩提心義」「発求菩提之心名菩提心。依主義也。若悟名覺迷為不覺。譬如迷人。依方故迷。衆生耳。依覺故迷。若離於覺則無不覺。猶是言之。菩提与心不得為二。菩提与心。相違积也。」大正四六、九八七a
- 26 大日經住心品(大正一八、一c)
- 27 菩提心論(大正三一、五七二c)

- 28 右同(大正三一、五七二c)
- 29 右同(大正三一、五七三a)
- 30 右同(大正三一、五七三c)
- 31 勝又俊教論文「菩提心展開論の系譜」印仏研九一
- 32 莊嚴經論(大正三一、五九五c)に「発心を因、大悲を根、地満(方便)を究竟とする」とある。
- 33 「方便究竟」の句は勝天王般若經第六に「以方便嚴淨仏土。又方便示現相好莊嚴。」(大正八、七一七)の經文と、撰・根本・等流・所依止の四種義が合併して三句が出来たと考えられよう。
- 34 成唯識論卷第三、(大正三一、十五a)に「是眼識等所依止故。譬如樹根是莖等。非眼等識有如是義。」とある。
- 35 赤沼智善著「仏教教理之研究」二〇四〜二〇八頁。
- 36 勝又俊教著「仏教に於ける心意識の研究」五〇七〜五〇八頁参照。
- 37 実又難陀訳華嚴經(八十)卷三十四地品(大正一〇、一八四a)
- 38 大日經住心品(大正三一、一c)
- 39 三昧耶戒序(弘法大師全集)「四言菩提心者。此有二種。一能求菩提心。二所求菩提。」
- 40 菩提資糧論(大正三一、五三三a)
- 41 右同。
- 42 右同。
- 43 法華經(大正九、一〇b以下)

- 44 右同(大正九、二〇b以下)
45 右同(大正九、二七b以下)
46 右同(大正九、二九b以下)
47 菩提資糧論(大正三二、五三三b)
48 右同(大正三二、五三二b)
49 右同。
50 金倉田照訳著「悟りへの道」解説—年代の頃 A. Schiefener
Tāranātha's Geschichte Buddhismus, p. 192 ff. (寺本訳「印
度仏教史」二三四頁以下。山田竜城著「梵語文典の諸文献」一
三七頁。
51 Journal of the Buddhist Text Society of India by Ha-
raprasād śāstri 1894, Bodhicaryā-avatana 1. 15, p. 2. 西
藏大第二六函入菩薩行集講上三
52 入菩提行經(大正三二、七五c)
53 ibid. Bodhicaryav. viii 67~103. p. 22
54 ibid. viii. 111~115 p. 22